『千葉大学　ユーラシア言語文化論集』18（2016）：101－119

エジネーのオーラルヒストリー（4）　アジヤースレン

児玉香菜子・サランゲレル

このテキストは中国内モンゴル自治区アラシャー（阿拉善）盟エジネー（額済納）旗[1]のアジヤースレンさんのオーラルヒストリーである。アジヤースレンさんの自宅で、児玉とダシダシナムジル氏により採録されたものである。言語はモンゴル語である。ダシナムジル氏はエジネー旗の案内役兼運転手である。氏は長く元旗長の運転手を勤めていたため、日本の 3 分の一の面積をもつエジネー旗の道と人を良く知る人物である。ダシナムジル氏の両親がアジヤースレンさんと同じように 1958 年にはじまる移住生活を経験しているため、顔見知りであった。そのため、聞き取りはたびたびダシナムジル氏に語りかける形で進行していった。採録されたものをサランゲレルがモンゴル文字で書き起こし、それを児玉とサランゲレルが日本語に翻訳した。

写真 1　アジヤースレンさん（2005 年 5 月撮影）

アジヤースレンさんは 1939 年生まれの牧畜民女性である。まず、オーラルヒストリーで語られるは 1949 年中華人民共和国以前の生活の苦しさである。衣食がままならず、生活は非常に厳しかった。そのうえ、強盗により生活がさらに困窮してしまう。それが 1949 年の中華人民共和国の成立によりこれらの襲撃がおさまり、生活が落ち着き、家畜が増え、生活が安定する。そのためであろう、生活

[1] 本テキストのモンゴル語表記はエジネー旗の方言に準じる。

の苦しさと同時に、1949 年以後の生活の安定が繰り返し言及されている。だが、苦難がなかったわけではない。1958 年にはじまる軍用地の土地接収のための移住によって 20 年にも及ぶ移住生活を強いられている。さらに、1966 年から始まる文化大革命で夫は殴り殺されており、本人も迫害され、健康を害し、大変な苦しみを味わっている。本テキストは知識人だけでなく、1949 年以前に貧しかった普通の牧畜民でさえも文化大革命から逃れることができなかったことを教えてくれる。

――あなたのオーラルヒストリーを話していただけますか。名前、氏族、父母、故郷について話していただけますか。

わたしの名前はアジヤースレンと言います。今はいつでもアジヤーというようになりました。今年（2005 年）66 歳です。卯年です（1939 年生まれ―訳者注）。70 歳と言っています。実は 66 歳です。わたしはマーゾンで生まれました。ホリン・シャンドの山と言い、フフ・マーゾンの東にあります。わたしはそこで生まれたそうです。10 余頭のヤギをもつ貧しい家に生まれました。わたしたちはきょうだいが多かったので、生活に困るほど貧しかったです。そのため、わたしを他家に養子に出しました。父母皆モンゴル国の故郷に戻りました。実の父母はモンゴル国に行きました。養父母はここにいて、皆亡くなりました。家は貧しく、人は多いです。このようでした。父母はマーゾンにいました。強盗が出て、父母はハルハに帰り、養父母はマーゾンからエジネーに来ました。家の生活は貧しいです。子どもが多いですから、わたしを養子に出しました。実父の名はダルジャーと言い、母の名はダシンジドと言います。生年は分かりません。モンゴル国に行って 60 年になります。わたしたちと再び会うことが出来ませんでした。わたしがちょうど一人座りができるようになったときに（生後 7 か月頃―訳者注）、養子に出したそうです。長い時間が経ちました。見ても分かりません。実の父母から生まれたきょうだいが何人かよく分かりません。上に 2 人の姉がいました。1 人はデリグと言い、干支は分かりません。もう 1 人はドルマーと言いました。今生きていれば、70 歳すぎ、80 歳くらいでしょう。ハルハで生きているのか、亡くなっているのか、分かりません。今はもう会う術がないのです。下に何人の弟妹がいたのか分かりません。年子の弟妹が何人かいました。双子もいました。

――養母の名前は何と言いますか。

養父はシャラブという人でした。マーゾンで亡くなりました。全身不随になり、亡くなりました。寝たきりになり、亡くなりました。養父は 40 歳くらいで亡くなったでしょう。若かったです。養母はルハムジャブという人でした。母ルハムジャブが再婚した継父はロドイという人でした。養父母もハルハから来た人でした。彼らの生活はまあまあです。少なめの家畜とラクダがありました。とても豊かではないですが、自分で生活できるほどです。200 頭弱の小家畜がいたでしょう。20 頭弱のラクダがいました。ラクダで運んで、移動していました。実父母は 10 余頭という少ない家畜をもつ家で

した。かわいそうに、当時家畜を本当に少ししかもたない家もありました。まあまあの数の家畜をもつ家もありました。どうしてこのようになるか分かりません。今でもそのようなことはありますよね。たくさん家畜をもつ家は家畜が多いです。人に雇われて生活する人もいました。実母は満州人に雇われていました。そのような家でした。人に雇われても報酬は低いです。裕福な家に雇われると、食事も満足に与えられません。おまけに殴ります。そんなうまい話はありませんよ。わたしの母もそのように貧しい生活でした。殴られたことはないでしょう。雇われて、人のモノを縫って、そうして当歳ヤギか 2 歳ヤギをもらっていたでしょうか。そのように生活している人でした。そのようにして生活していましたが、故郷に戻りました。一部の人びとはモンゴルに戻っていません。モンゴルでは人を殺したり、殴ったりと大きな粛清が起きました[2]。これを恐れて、彼らは亡命し、道中餓死した人もいますよ。その苦労は語り尽くせません。モンゴルにいることができません。モンゴルにいれば、全員捕まって連行されるそうです。そのようですから、モンゴルにとどまることがどうしてできますか。そのようでした。ダー・フレー（現ウランバートル）から始まって、たくさんの車でラマたちを連れだして殺したそうです。その後、ラマたちと何か関係があるとかで多くの人が殺されました。どんな理由か、分かりません。そうして、社会が混乱しました。おお、皆離散しました。モンゴル国の人たちです。この西の粛南一帯にたくさんいます。家長もおらず、孤児で亡命してきた人たちもいます。大変ですね。モンゴルの国境に 2 軒の家があったそうです。突然、2 人の人が来て、滞在していたそうです。どんな人か分かりません。そうしていて、ある日、

「罠が野外にあれば、集めて来なさい。それを集めなさい。」

と言いました。そして、夜、それを集めて帰ってくると、

「1 軒の家に集まってください。ご飯を作ってください。」

と言ったそうです。1 軒の家に集まると、家のドアの前に立って出られないようにして、全員を殺したそうです。姉と弟の 2 人の子供、姉は 10 何歳、弟は 8，9 歳だったでしょうか。この 2 人の子供を残して、他はみんな殺してしまったそうです。この 2 人の子供に家畜を追わせて、どれぐらい行ったでしょうか。そして、この 2 人もすごいです。

「2 人で逃げましょう。生死は関係ありません。この状況から逃げだしましょう。」

と相談し、走って逃げだして引き返しました。飢え死にしなかったそうです。弟を連れて逃げたそうです。逃げだして、粛南に行ったそうです。最近、生きていると聞きました。すごい子供ですね。向こうに着いて、家畜を追わせ終わったら、殺していましたよ。このような事件が起きたので、亡命、離散してしまいましたよ。あー、その夏は飢えと渇きで死んだ人がたくさんいます。わたしたちもその中の一人です。それは 40 年代でしょうか。30 年代のことです。この大きな困難を語り尽くせません。ラマの身分がある人を皆殺しにします。逃げ出した人は亡命、離散しました。語り尽くせません。

---

[2] 1930 年代の粛清を指す。

わたしが幼いときに、マーゾンにハラ・デブルトが来たので、わたしの養父母は逃げ出そうとしたとき、家畜をおいて行こうとしたけれども、家畜をおいて行くと、生活が成り立ちません。それで、家畜を連れて逃げ、酒泉を通って、粛南の手前に着きました。おぉー。その強盗は残酷で、家畜を力ずくで盗ろうとし、わたしたちが返してくださいと乞うと、逆に、殴ります。皆このようで、北に行っても強盗をし、粛北の人びともまた離散しました。今日無事に過ごしていても、次の日には何もなくなるというような時代でしたよ。早く逃げ出せれば、無事な人もいました。逃げ遅れたら、殺されます。当時、トーレイ[3]の木の落ち葉が地面を隙間なくおおっていて、足音が大きく響きました。そのため、どこに隠れても、夜中に「カサカサ」と音が出るために、どこにも隠れることができませんでした。そうしていると、隣から、カザフ[4]が「ガサガサ」と来ました。こちらからカザフが攻撃してきて、向こうからムテル[5]が攻撃してきて、そのときにエジネーに毛沢東の新政策がなかったら[6]、エジネーはなかったでしょう。両方から強盗が来て、昼夜なく攻撃を受け、ラクダと小家畜を群れごとに次々に連れてかれます。「銃を持っている人は誰か」と脅かして聞きだして、探し出すと、殴り殺します。腕力がある人を探し出して、捕まえて、殴り殺します。「裕福な家はどこだ」、「軍隊はどこだ」と脅します。半分が殺されて、半分が逃げ出して生き残り、今に至っています。解放[7]後は共産党のおかげで幸せです。幸せですね。強盗の先頭はムレン川（西川）に来ましたよ。ナワンという人を捕まえ、そのうえ、見張り兵を 1 人殺しました。一晩中、叫び声をあげながら入って来て、どこでしょうか。殺したそうです。ああ、当時は生活することが困難な時代です。共産党の政策が入って来て、衣食住に困らないようになりました。平和に生活することができるようになりました。それ以前はどこに平和があったでしょうか。わたしは幼かったです。その時代を少しだけ経験しました。本当に困難な時代でした。ある日、姉、この北に住んでいるナスンバトの母と一緒に、家畜の放牧に行きました。ナスンバトの母は養父の姪で、わたしは兄と姉について、家畜を放牧していました。当時、粛南にいました。その日は、姉についてナスンバトの母と家畜の放牧に行き、朝なので暖かいところに座りましょう、と姉と座って少しすると、銃声が聞こえました。家畜の放牧から戻って来て、養父を撃っていたことを知りました。父が逃げて、なかなか当たらないので、銃剣で刺しました。ラクダのおしっこのように血が流れて、突然倒れたそうです。養父はとても苦しみました。薬がないので、大量に出血しました。それで、父は 1 年余り人の手を借りて歩いていました。ある家が薬をくれて、半分を塗って、半分を飲ませていました。そのようにしてよくなりました。無事に生きて、共産党の

---

[3] ヤナギ科ポプラ属、高木。学名は *Populus euphratica* Oliv.，漢語名は胡楊。同定は Konagaya et al（2011：347-349）による（以下同）。

[4] カザフ人の略奪について、ゴンガー氏（児玉ほか編　2014：302-303）とソルマージャブ氏（ナムラ他　2014：339）も言及している。

[5] 内モンゴル東北地域出身のモンゴル人たちをいう。この場合は徳王の軍隊を指す。

[6] 1949 年の中華人民共和国成立のこと。

[7] 1949 年の中華人民共和国成立のこと。

よい時代を見て、経験しました。80 歳過ぎで亡くなりました。はぁ、当時の敵というのは残酷です。血をどのように止めたのか、分かりません。母と姉が止めました。わたしは何もできません。泣く以外は何もできません。偉大な毛主席と共産党のおかげで、新しい社会を迎えました。1949 年の解放後、食べ物に困らず、飲み物にも困らず、そうでなければ、わたしが覚えている限りでは、かわいそうな母は夏になるとヤギの皮の毛を取り、服を作ってくれます。冬にヤギの皮の服を作って着、靴を作って履きます。だいだい裸足で、履く靴がありません。なつかしい養父母はいい人ですから、自分たちが飢えても、姉とわたし 2 人を飢えで苦労させることなく、食べさせてくれました。飢えたことはありません。他人に何か仕事をするかわりに、キビ、裸麦のブーン[8]、クチ[9]などをもらってきて、わたしたちにお粥を作ってくれていました。そのため、飢え死にしていません。本当に家畜のおかげで生活できます。夏はヤギを搾乳して、アイラグ（発酵乳）とミルク[10]を飲みます。夜、1 杯飲んで寝ます。朝起きると、長方形のホロード[11]とアワを少し入れたオンド[12]を飲みます。それでおなかがすくことなく、一日過ごします。そのホロードを舌できれいになめて、少しも残さず食べていましたよ。父母の世代にはすごい人がいました。今でもそのようでしたら、わたし自身でモノを手に入れて食べることができません。子どもを育てて大きくしてくれました。わたしは 10 何歳で 20 数頭のラクダを放牧していました。ある夜、ラクダの放牧から戻って来て、取ってあった食事を食べて寝ました。夜中、カザフが来て、ゲルの周りをまわって、ぼろいフェルトのカバーを上にあげて入って来て、捕まりました。銃を向けて、「立て」と怒鳴りました。父母は残りました。わたしは逃げようとしましたが、1 人で逃げて父母と別れて、生活することはできません。一緒に死のうと思いましたが、一緒に死ぬことはできませんでした。夜が明けて見ると、樹間を通って、荷車と車で来て、フェルトのカバーを上にあげていました。「その子どもを渡せ」と言うと、父は「渡さない」と言うことはできないですが、家から出て、彼らの前に立ちました。母も父の後について出ると、わたしは母の足にしがみつきました。父母 2 人をウマの鞭で叩こうとしましたが、この 2 人を鞭で叩いても無駄だということが分かったようで、銃で撃とうとしたときにちょうど、ウマに乗った酔っ払ったみたいな人が出て来たので、撃つのをやめて行ってしまいました。そうして、私たち 3 人は生き残りました。全部モノを持って行きました。食べ物は何もなく、父母がどこに行ったのかも分からず、兄もいなくなりました。彼らはわたしたちのモノを奪い取り、わたしたちのところで生活すると言って、全部奪い取り、

---

[8] 裸麦を煎って挽いたものをザンバーという。これをバターとチョルマーと混ぜてこねて小さく丸めたもの。チョルマーとはチーズの一種で、アールツ（発酵乳を加熱して濃縮したもの）を脱水したものを手でつかんで指の間から細く搾り出して、乾燥させる。

[9] 小麦粉や裸麦を水で煮つめたものをいう。ミルクや肉汁で煮詰めることもある。肉汁には主に家畜の頭を煮て得たスープを使う。

[10] アイラグに少しミルクを加えて味を調整していたもの。

[11] チーズの一種。アールツを脱水したものを手で握って作る。

[12] ヒツジの脂肪やバターを熱して溶かし、生の小麦粉を加えて炒め、狐色になったところへ、煮出した茶を注いで作る料理。ここでは小麦粉の代わりにアワを入れている。

家のフェルトを奪い、家の柱だけを残しました。肉もありません。夜が明けると、そのようでした。母が川に行くときに、わたしもついて行き、川の岸が崩れているところがありました。そのあとしばらく母にしがみついていましたが、そのうちに平気になりました。そうしているうちに、時間がたち、敵もかなり遠くに行ったようでした。群れをなしてラクダを追っていき、ラクダが川の泥にはまってしまし、ラクダをおいて行きました。はぁ、ラクダたちが鳴いて、鳴いてかわいそうです。ラクダはこのようなときに涙を流す生き物ですよ。はぁ、見ていられません。そのままで翌日まで生きているラクダもいましたよ。わたしの父母もすごい人たちでしたよ。泥を掘って、何頭か助け出しました。そうです。泥からです。泥からですよ。川の水は満杯でした。そのラクダは川の上流の人たちのラクダで、そのラクダたちを助けだしているとき、皆来て、ラクダを全部連れて行きました。彼らが来た時、わたしたちに食べ物を少し渡します。そのおかげで、食べ物が手に入りました。その後、エジネーにやって来ました。来てから、家として、小さなショボーハイ（ゲルの一種で、小さいゲル）を建てました。着る服がありません。わたしのかわいそうな父母の 2 人は他人の仕事をします。当時、皮をなめします。バヤンジャラン[13]という家がありました。その家で裁縫し、洗濯をします。それで、少しご飯をくれます。その冬を過ごして、春に差し掛かろうとするとき、あぁ、寒さが厳しいときに数頭の家畜にあげる飼料もありません。家畜が死にます。あぁ、その冬に着る服もありません。とても寒いにもかかわらずです。そのため、そこから移動して、ある家の近くに行きました。それはゴンガー[14]の父母でした。彼ら 2 人はとてもよい人でした。少しモノがある家でした。彼らのモノも少なく、かわいそうです。その家は男の子と女の子の 2 人の子供がいます。その家のそばでその冬を過ごしました。着ていた古い服をくれました。その家は敵に襲われていません。そのようにして過ごしました。そして、解放になりました。共産党のおかげで、次の夏から衣食に困らなくなりました。

かわいそうな兄はいなくなっていました。夜、

「川の泥があるところに行って、水を取って来て、いい子ね。」

と行かせていました。以前は人について行っていましたが、その晩は 1 人で川の岸に向かうのを見ました。小道を行き、岸をこえて見えなくなりました。川の中を飛び跳ねながら進みました。進んでいくうちに、ブヒーン・モドの中にあるエジネー川（南川）に入り、バインボグドの上流で川から出て来たそうです。しかしながら、全身凍傷だったそうです。当時 11 月になっていたでしょう。凍傷で、春になると皮が剥げ落ちました。

他の家のそばに来ました。1 軒の家がありますね、と来て見ると、食べ物をくれました。少しの穀物と鍋一つで着きました。ラクダを助け出してあげた家からもモノを少しもらいました。

川の南側に 2 軒の家がありましたが、カザフがそのうちの 1 軒の家の奥さんを連れて行ってしまい

---

[13] ジャランは清朝の官名、参領をいう。
[14] 児玉ほか編（2014：299-326）。

ました。夜にどうやって川から出たのかと聞くと、ウマの首に両腕をかけて縛りあげ、ぶらさげていたそうです。そのようにして、深い水の中を通っていったそうです。

「逃げたい。」

と言うと、

「逃げたらすぐ殺すぞ。」

と言いました。逃げだす方法もなく、死ぬしか彼らの手から逃れる方法はありません。その家の奥さんと子供を連れて行きました。誰だったか、名前を忘れました。川のそばにいた兄弟 3 人を連れて行ったそうです。それで、その 3 人を新疆で捜して連れて帰って来ました。当時は怖いので、連れてくることができません。解放後、人民が自由になった時代に連れてくることができるということが分かりません。分かっていたら、その子供たちを探して見つかります。知らないですから、間抜けみたいに過ごしてしまいました。その家の妻子を連れ戻すことができませんでした。

その後、ここに来たある人びとの中にモンゴル人が 1 人いました。3 人の子供の一番下はカザフになついて、ここに戻ってくる気がなくなったそうです。一番上はハゲになっていました。言葉を覚えないので、毛を抜かれてハゲになったそうです。人民解放軍のラクダ数頭を放牧していたそうです。ある日、兵士が 1 人やって来たそうです。

「おまえの故郷はどこだ。親兄弟はどんな人だ。」

と聞きます。

「わたしたち兄弟 3 人は連れて来られた。」

と話したそうです。

「兄弟が分かりますか。」

と聞かれたので、

「分かります。」

と答えました。それで、その兵士は新疆にいた子供たちを集めて、

「このなかの誰があなたの弟たちですか。」

と聞くと、

「2 番目の弟はこの人で、3 番目の弟は彼です。」

と答えました。3 番目の弟は泣いていましたが、連れて帰って来たそうです。下の弟は幼いときに行ったので、覚えていませんでした。右旗のゴンボスルンが連れてきました。言葉を勉強して何かできるようにならなければ、苦しめられるそうです。毛を抜かれ、逃げれば、後ろから銃で撃たれます。その年、ナラン・フフ・ボルガスから逃げ出した人たちを撃って、子どもの頭がぶらさがり、そのようにして殺したそうです。幼い子どもの両足を縛って殴って頭を割って殺していたそうです。そのようだったそうで、本当に罰当たりなことをしていたそうです。その敵をここで倒すことができず、飛

行機が来て、60 年代末にようやく攻撃したそうでした。あなた（ダシナムジル氏—訳者注）は分からないでしょう。イリ、ウルムチという場所に砦を作り、よく出て来て強盗をしていたそうです。解放後、共産党の力で何とかして退治することができたでしょう。山に砦を作っていたので、入ろうとして、いろいろな方向から攻撃しようとしてもできず、飛行機が来て、鎖を降ろして、上から見て、カザフたちが全員集まっているような時に、爆弾を落としたそうです。ある時、ダムダジャーという人がマーゾンに来て話しました。そうして、ようやく退治できました。その廃墟は全部まだあります。ボグド・エリャン・ハビルガ[15]というところで、そのように攻撃したそうです。しかし、私たちを圧迫することはおわらず、私たちの故郷をすべてカザフにあげてしまいました。基本的に、30 歳以上は罪人とし、30 歳以下に土地を分け与え、セルテンとマーハイというところを全部カザフにあげたと話していました。それでようやく平和になりました。党のおかげで幸せです。昔はとても苦労しました。養父母について食べ物があるときもあれば、ないときもあるという状況でした。ある時、兄とわたしの 2 人はどこに敵にいるか分からないので、家に戻ることができず、嘉峪関にあるハラ・オールという山に何日か野宿して、1 人が戻って食べ物を持ってきて、家畜を山の崖に隠していました。そうしていると、ある日、軍隊がやって来ました。とても怖かったです。国民党の軍隊の中にもいい人がいるかなと思っています。嘉峪関の軍隊で、人民の少なくない人たちが山に閉じ込められていて、生活ができなくなっているとして、軍隊を派遣しました。トルガナの先に閉じこめられていました。それで、わたしたちを嘉峪関で一泊させ、酒泉のバローン・オール（西山の意）に連れだしました。いい人がどこにでもいる必要があります。背の高い、色白の隊長が軍隊を連れて来て、わたしたち数軒の家が閉じ込められているのを連れだし、太い囲いにラクダと小家畜を過ごさせました。次の日、まず軍隊の一部を出発させ、次に軍隊を一部選んで、一団となって進み、嘉峪関に長く生活はできないので、わたしたちを、一団をなして保護しながらエジネーの砂地に連れて来てから、行ってしまいました。そのようなことがあったので、ラクダと小家畜が少なくなりました。今まで 50 数年間よい生活を送っています。文化大革命の時はとても大変なことになりました。話してどうしますか。みんな知っていますよ。全部なくなりました。悪い人がウソをついていました。

——あなたの母は何人きょうだいでしたか。

母にはきょうだいはいません。弟妹たちは皆モンゴルに行ってしまいました。サンジという父の弟の妻の妹がいました。サンジドとも言います。父の弟はラマで（殺され—訳者注）、彼の妻はとても体の弱い人でした。「危篤です」と言って、お見舞いに行ったりしているうちに、7 日で亡くなりました。それで、母がサンジを養子にしました。わたしのきょうだいは皆養子で、3 人です。兄は午年で、2 番目はわたしで、3 番目はナンスルマーという妹です。酉年だったでしょうか。忘れました。

[15] 哈日烏蘇（ハラウスン, Hara-usun）。現在の新疆ウイグル自治区イリ・カザフ州烏蘇県。

わたしより 10 何歳年下です。おそらくあなた（ダシナムジル氏―訳者注）の世代でしょう。母には子どもがなく、その大変な時代に 1 人子供を生んだそうですが、早産で、病気になり、亡くなりました。わたしたち 3 人を養子にしました。

兄は誰から養子にもらったかというと、夫婦 2 人何もなく、子どもをおんぶして、家々をまわって食べ物をもらって食べ、乞食のように暮らしている人たちがいたそうです。そのラマの受難のときに、モノをすべて捨てて逃げて来た人たちでしょうか。何もありません。子どもをおんぶし、わたしの家に来て、食べに来ていたそうです。「子どもをわたしたちにください」と母は言おうと思っていたそうですが、言うことができなかったそうです。一人っ子ですからね。そうして、ある日話すと、

「もらってください。わたしたち 2 人の様子を見れば分かるでしょう。飢え死にします。わたしたち 2 人には何もありません。」

と言ってくれたそうです。その 2 人がどこに行ったのか、分かりません。子どもをあげて、モンゴルに行ったそうです。その大きな反逆者の敵が来ている間にどこに行ったのか、私は分かりません。妹のナンスルマーの実の父の名前はサンダグと言います。ノゴーン・サンダグという名の人でした。母はサンチグでしょか。忘れました。亡くなりました。きょうだいが多いです。生きている人もいれば、亡くなった人もいます。彼女は知っているでしょう。

――他のところに行ったことがありますか。

ありません。行ったことはありません。母は養子に出していません。他人の家に養子に出すと言われても、母は養子に出しませんでした。死んでも養子に出さないと言いました。わたしたち兄妹を皆、養子に出していません。少し食べ物が手に入れば、それをわたしたちに与えて、育てました。人に養子に出していません。他の家で働くことなく、母のそばにいました。家畜を放牧していました。のちに、共有になりました。のちに、300 頭くらいの家畜をもっていました。20 頭くらいのラクダがいました。58 年に半分を合作社に供出しました。私有は 1 人につき 2，3 頭のヤギだけとなり、人の家畜を放牧するようになり、のちに皆人民公社の家畜になりました。家畜を全部供出しました。57 年です。当時わたしたちは川の上流にいました。そして、やってきた軍隊に土地をあげると言って、わたしたちを移住させ、その移住生活は 20 年に及びました[16]。マーゾンを出て、ゴルナイに行き、ゴイズに出て、行ったり来たりしました。そのため、草がないですから、家畜がなくなった家もあります。数頭の家畜をおって、モノを全部捨てて来た人もいます。なぜなら、車や汽車で別々に運んだので、どこに行ったのか分からなくなり、モンゴル・ゲルがなくなった人もいて、その移住の際にもまた多くを失いました。

[16] 1958 年の軍用地接収にともなう移住のこと（額済納旗誌編纂委員会　1998：19；児玉　2007：166-167）。

――どうやって移住しましたか。

今ロケットを置いている場所[17]を明け渡す、と移住しました。その場所は皆わたしたちの場所でした。66 年になると再び文化大革命というのが起きて、皆なくなりました。移住する時に殴って殺し、家畜もなくなりました。その文化大革命の時に、前夫も亡くなり、わたしも何人かの子どもとあちこち家畜を放牧し、人に罵られます。わたしたちはもともとバインボグド山とバインボグト村の間にいました。ツァガーン・ロス、オルボグ・トホイ辺りにいました。どうしてそのような名前を付けたのか、分かりません。昔からそのような名前でした。ゴルナイに冬に行きます。夏にここに来ます。10 年くらいになります。52 年末からここにきて夏を過ごします。58 年からここにいられなくなりました。本来はここにいました。ここからゴルナイに行きました。58 年に軍隊の場所になり、それからゴルナイに行きました。ゴルナイに数年暮らしました。58 年から 61 年までゴルナイにいて、62 年にマーゾンに行きました。ゴルナイにいるとき、行く場所がありません。当時は仕方がないです。牧地がないので、1 年中そこにいました。少しだけ移動しました。それでも、草がよかったです。のちに、またそこにいてはいけなくなり、マーゾンに行きました。62 年にマーゾンに行き、66 年に戻って来ました。マーゾンではあのシャル・マーゾンやシャル・トーレイのあたりをまわっていました。

ゴルナイにいるとき、小家畜、つまりヒツジとヤギを放牧していました。マーゾンでも同じで、ヒツジとヤギを放牧していました。66 年にこのタルバイに来ました。そこからも追い出されました。わたしたちのこの村をタルバイから追い出しました。そうしなければ、戦争になると言って、再び全員をここに連れて来ました。66 年に連れて来ました。

――いつ結婚しましたか。

58 年に結婚しました。彼は公安局の人でした。文化大革命の時に亡くなりました。58 年春に結婚しました。ダーゴーという名前の人でした。彼は公安局の仕事をしている人でした。ハルハ人で、もともとはバインボグドに住んでいた人でした。彼もその移住をしました。彼は幼いときから軍隊にいました。兵士でした。それで公安局に勤めました。解放前は国民党の時代に軍隊にいたでしょう。軍隊のウマを管理し、軍隊の仕事をしており、そうしていて、のちに公安局に入ったそうです。わたしの義理の両親の名前はというと、義父はラムスルン、義母はメデグという名前でした。夫のきょうだいは 7 人でした。一番上はわたしの夫でした。辰年の人でした。2 番目は双子でした。アーフー、オーフーという人で、2 人とも男でした。やはり辰年でした。夫から 13 年後の辰年に生まれたそうです。また 2 人の妹がいます。あっ、上に兄 1 人と姉 1 人がいます。一番上は姉でした。1 人息子がいて、ドルムという名前でした。干支は分かりません。2 番目は国民党の時代に、国民党が捕まえて連

[17] 現在の酒泉衛星発射センター。センター名は酒泉となっているが、所在地はエジネー旗内である。

れて行き、拷問して殺してしまいました。デルデゲルという名前の人でした。夫の兄です。3 番目はわたしの夫です。2 人の妹は存命で、エレンゼンとバダイといいます。オラーンバガナの母はバタイと言います。きょうだいは 7 人で、今は 2 人が存命です。バダイは 72 歳で、もうすぐ 73 歳です。分かりません。一昨年（2003 年―訳者注）エレンゼンの 70 歳で長寿のお祝いをしました。バダイが姉です。もうすぐ 73 歳で、バダイの長寿のお祝いを 73 歳でします、と言っていましたが、できないようです。

夫はわたしより 10 歳年上でした。もとから顔見知りでした。その移住も経験しました。その移住を経験した人はあまり多くありません。このダシ（ダシナムジル氏のこと―訳者注）の両親ともに若かったです。フルヘゲル・ツァガーン・トロゴイにいるとき、とても若かったです。わたしは彼らの三つ子を見にマーゾンに行くと言って、マーゾンによく行っていました。ここにいるとき、よく訪問していました。とてもかわいくて幼かったです。両親 2 人はとてもよい人たちでした。わたしの両親 2 人、彼らの両親 2 人はとても仲良しで、いつも話していました。そのような人たちでした。その 10 数年に及ぶ移住もすべて一緒に経験しました。マーゾンにも彼らも行きました。三つ子はそこで産まれました。シャル・マーゾンの東側で三つ子が生まれたと聞いて、わたしは一度わざわざ見に行きました。しかし、2 人の女の子は見ましたが、男の子がいません。どこにいるかと見ると、お母さんの後ろの食器棚に隠れていました。本当に幼く、かわいい子どもでした。

66 年にタルバイに住まわせず、そうしないと争いになると言っていました。指導者たちが話しあっても、話しあってもできませんでした。家の外に来て居座って、その家が家畜に水やりをしようとしてもさせず、銃を持って座りこむか、そうでなければ、ムチで打つと人びとが話していました。あー、行かなければ、殴ります。それでわたしたちはみんな戻って来ました。やって来て、ここに入るのもあれば、そこに入るのもあり、皆なくなりました。バインツァガーン、バインホンゴル、ヌスルの 4 つのバルガータ[18]がありました。フルンゴルもわたしたちのバルガータでした。そうです。ヌスルというのをやめて、フルンゴルというようになりました。三つ子の家族はゴイズに行きました。バインホンゴルの方々はゴイズ[19]に入りました。わたしたちは行きませんでした。62 年に行き、66 年に戻って来ました。家畜がなくなり、モノもなくなり、ここに車で運ぶと汽車で運ぶと、川の下流の方に行ってなくなり、そうしてほとんどなくなりました。布団と茶碗はほぼなくなりました。持ってきたとしてもなくなり、建てる家がなくなった家もあります。草を探して移動して移動して、何もなくなりました。ゲルが半分になった人も、ゲルがある人もいます。布団以外何もなくなりました。すべて置いてきてなくなりました。老人、子どもで移住の最中に亡くなった人もいます。どうしようもないです。国の政策で、国に貢献しているのですから。今、少し気遣ってくれるでしょうか。ないでし

[18] 生産隊。人民公社の基礎となった村の生産組織。
[19] ントゴル村の別名。

ょうか。分かりません。今ロケットを置いています。それは皆当時わたしたちが暮らしていた場所で、皆わたしたちの故郷ですよ。今は故郷がありません。国が少し気遣ってくれるでしょう。文化大革命の時に、スパイだとウソをついて、殴って迫害しました。あー、一生の間に多くのことを経験しました。いろいろなことを経験しました。行ったところはそれらで、人生というのはこのようですね。シャル・マーゾン、ラオ・サオ・ゴウ、バローン・ジャンジンティ、ジャツォト・オラーンなどにいました。東側はあなたたち（ダシナムジル氏家族—訳者注）で、西側はわたしたちで、フフ・マーゾンの東西にいました。雨が降ると、とても美しいところでした。干ばつというのがありません。よく雨が降ります。家畜が鳴いて、石が赤くなります。

——旗に家をもらいましたか。

子どもに 1 軒あげたそうです。わたしたちは 2 世帯です。移民村に子どもに 1 軒の家をあげたそうです。バトルフは左旗にいます。今話したのはバトルフの次で、息子で、バトウルジと言い、娘が 1 人いて、彼も 3 人家族です。そこで、1、2 頭を飼育することしかなく、他の仕事はありません。わたしたちにはする仕事がありません。子どもたちと別々にいるのもよいです。今どうするのでしょうか。

その年、ツォルモンと言って、わたしたちを嫌って、とてもいじめました。アラシャーにいました。このエヒンツァガーン・バルガータの書記で、ボインの長男が印章をとってしまいました。昨日わたしのところに来ました。書記と隊長（バルガータの長の意）の 2 人に給料をあげると言って、6 千元の給料を支給したそうです。1300 元を隊長にあげて、残りを全部取ってしまったそうで、「わたしは泣きたい」と話していました。それで、わたしたちは

「訴えないのですか。あげません。彼に奪われてはいけません。」

と言いました。アラシャーのトムンバイルの妻だった人と一緒になった人です。あなたは（ダシナムジル氏—訳者注）おそらく知らないでしょう。わたしたちのところには牧地がなく、この家族たちがとってしまいました。それで、サインをさせようとしましたが、わたしは死んでも、あなたの前で頭を下げないし、サインをしませんから、あなたに方法はありません。以前は地主や金持ちは貧しい人に無理やり捺印させて、子どもを連れて行っていました。白毛女[20]も連れて行きました。そのようにするでしょうか。それで、サインをしていません。サインをしてはいけません。大変なことになります。2 つの隊を合併するそうです。そのするとどのようになるか分かりません。民間でそのように話しています。合併していないですね。そうであるなら、指導者にはよい人を選ぶはずでしょう。わたしたちの指導者はよくありません。自分の親せきに便宜をはかり、他人をのけ者にします。そのような指導者がどこにいますか。本当に功績がないだけでなく、苦労が多いです。何年も、生まれたとき

[20] 「白毛女」という映画の名前。主人公の名も白毛女。

から苦労がありますよ。どこに移住しろと言われれば、そこに移住し、何百人もが止まらずに進み、老人たちは皆死んでしまいました。解放後は、文化大革命という大変な苦しみを味わいました。国に土地をあげると言って、移住させられて苦しみました。ラクダで運びます。ラクダが進むことができなくなると、やかんに入れた水をあげて、立たせて、荷物を載せて、再び進みます。当時の人びとは体が丈夫でした。今思うと、ラクダに小麦粉を混ぜたものをあげて立たせて進んでいました。本当に苦難に満ちていました。それで、家畜も死に、家畜をすべて失った人もいます。どうと言うのでしょう。人も死んでいます。バンザルおじいさんという人がいたでしょう。レセルの西側にいて、たくさんの家の荷物を集めていました。それでわたしも少しモノを持って行って置きましたが、わたしの妹が

「こっちに、こっちに。ご飯を作りました。来て食べて。」

と言いました。そのようなことをしない人でした。「それではご飯を食べてから、行きましょう」と、行くと、一杯のご飯をくれました。幼い子供たちを連れて、わたしたちのところで食べていました。息子は 1 人で、かわいい子でしたよ。ドルジダンバーと言い、かわいそうに死にました。マーゾンに移住して、亡くなりましたよ。その移動の際に面倒を見る人がどこにいますか。1 台の大きな車で酒泉に行き、そこで降ろします。その際に死んでしまいました。その際にはとても若かったですよ。おぉ、幼かったです。父母はとても苦しみました。家に人が多く、踊ってにぎやかで、とてもかわいい、行儀のよい子どもたちでした。食事をとる際、並んで座り、お互いに仲がよく、ケンカをせず、そのエル・ワチルおじいさんは彼らをからかっていました。

「おっ、おちんちんをとっちゃうよ。とっちゃうよ。」

と言うと、誰が言ったでしょうか。

「えー、おばあちゃん、わたしのおしっこをするものですよ。」

と言いました。エル・ワチルおじいさんも移住の際に亡くなりました。移住して移住してその間に、気が付くと亡くなっていました。では、たくさん話しました。どうでもいいことを話しました。電気がなくなったでしょう[21]。

――文化大革命のときにあなたも迫害されましたか。

わたしの夫をモンゴルのスパイと言って捕まえて行き、エルデネゲレル[22]の忠犬と言って、監禁しました。公安局で 2，3 人が亡くなりました。リブジドという人が、わたしの夫が亡くなりましたと言いました。フフホトから来たエンケという人がいましたが、オラーンフー（烏蘭夫，ウラーンフー）のスパイとして殴られて亡くなりました。殴って監禁している間に殺しましたが、殴り殺したとは言

[21] 録音機の電池のこと。
[22] 当時のエジネー旗長。

いません。皆首を吊って死んだと言いました。中に監禁されていたハスバガナとイエン・チンシャンが殴り殺されたと言いました。建物の西側に足を向け、うつぶせになって、血だまりがいくつもできていました。わたしたちを連れて、「捨てろ」と言いました。殴り殺しました！外套が 1 着あったので、それで上半身をかぶせて捨ててしまったと話していました。ハスバガナ、イエン・チンシャンは一緒に監禁されていた人たちです。殺されたとわたしたちが分かるでしょうか。彼らが教えてくれました。それは 68 年のことです。とても残念です。文化大革命は大変な災難でしたよ。わたし自身を罪人として脅しました。話すことなどないのにです。それでわたしの腰を殴り折り、感覚が麻痺し、耳が聞こえなくなりました。とても苦しみました。ダワーサンブーという人がいました。彼は省から来て、またブレンチという人も来て、脅して、蹴り、いじめて殴ります。わたしも怒りでおかしくなりました。恨んでいます。何もしていない人を殺し、そのように苦しめます。当時、バダルフーは 7 歳でした。ジイ・シャンというすごい人が省にいたでしょう。彼はバダルフーに

「おまえの両親と姉は何を話しているのか。話しなさい」

と言いました。しかし、何も言いませんでした。何を分かるというのでしょうか。たった 7 歳です。それで、連れてきて体を吊るし、一日中泣かせ、夕方太陽が沈む時に気を失っているのを連れてきて、投げ捨ててしまいます。そのように苦しめていました。そうしているうちにわたしは全身が病気になりました。心臓は少し何かあると動悸がし、10 数年薬を飲んでも治りません。腰を殴られましたが、骨の中がダメになりました。それで、513 軍病院の医師にとてもよい医者がいました。それで助かりました。それは本当にダメになっていて、腎臓が一つダメになっていて、たらい一つ分の血をとりました。このように長く、このように太いモノで、棒が壊れてなくなるまで殴っていました。止めに入っていました。止めに入っていなければ、死んでいますよ。彼らは皆死にました。

兄もまた迫害されました。兄の妻の妹は会計でした。何があったというのでしょうか。

「お金が足りない。お金を横領した。」

と言って殴ります。誰が何を言ったのか、誰が分かるでしょうか。何の問題もないのに、モンゴルのスパイといって、旗長たち皆を彼らの犬、

「お前はエルデネゲレルの家来だったのに何で知らないのだ。」

と言って、わたしの夫を殺し、わたしも罪人だと、

「エルデネゲレルの罪を言え。」

と言いました。いえ、だいたい誰が分かるでしょう。国の仕事をしていた人たちがいなくなりました。わたしは子どもたちと暮らしていました。家畜を放牧していました。指導者がどこに行けと言えば、その言葉に従って、行かなくてはなりません。指導者ですから。自分で自由に行くのではありません。罪を犯したことになるはずがありません。今日、その家が移動しなさい。井戸を掘りなさい。囲いを立てなさい。移住の際も、行きなさい、と言われて行ったのです。逆に、皆、罪になり、そうして皆

亡くなりました。お互いに仲を悪くさせます。何も問題なかったのにです。

「お前は階級を分けますか。分けませんか。」

と言って、このようにお互いにケンカさせ、そうして階級を分けます、とある人たちは政策に従っていました。「おまえは悪い奴だ。わたしは良い人だ」というようにです。

今年（2005 年―訳者注）、西柏坡[23]、共産党の基礎となる場所に行きました。毛主席が住んでいた建物がありますよ。隣に江青の住んでいた建物があります。毛主席の護衛兵が隣にいますよ。彼はわたしたちと一緒にまわりました。解放当時は 2 人の関係はとてもよかったです。歳を取って、江青が権力を握りました。それでこの国をめちゃめちゃにしたそうです。その護衛兵が話していました。70 歳代でした。そのまま残っています。顔を洗っていたタオル、布団、当時のモノがすべてありました。よく保存していました。観た映画では、戦争をして、建物の上から見ると、煙が出ています。当時のような街でした。煙がのぼって、群れを成す人びとを集めて、大砲というものを撃って、そのようでしたよ。すごかったです。文化大革命の際に、多くを壊しました。何万という人が迫害されました。のちに、名誉回復のときには老人たちはすでになく、子どもたちとわたしたちのような人びとが残りました。父母がいなければ、孤児になり、誰が面倒を見るのでしょうか。このような状況にまでなりました。オオカミはオオカミ、オオカミの子どももオオカミとされました。そのように私たちを罵っていました。このタルバイで多くの人が亡くなりました。ここからそこまでの間に、一人一人がボルガス[24]のようなモノを握って、脅していました。殴り、鞍のないラクダに乗せて、省に運んでいました。そこで死んだ人もいれば、ここで死んだ人もいます。食べ物をあげず、金を渡さず、食堂のご飯を食べ、鍋を洗った水を飲ませていたのですよ。そのようなことをしていたのです。奴らは皆狂っていましたよ。キビのこげかすを洗った水と混ぜて、「食べろ」とあげていたときもありました。黄色いものを吐く人もいました。はぁ、本当に敵がすることをしていました。

――当時、裕福な人を悪いとしてたくさん殺しましたか。

皆捕まりました。裕福な人のモノも取り上げました。共有の家畜も全部取り上げました。オラーンフーの仕事を発展させたと、オラーンフー路線と言って、家畜を群れごと殺し、まもなく生まれそうで、半分出てきた子ヤギの首を切って殺し、生まれたばかりの子ヤギを殺し、それは本当に罰当たりです。

「そのようにしないでください。わたしたちが世話をし、殖やします。」

と言うと

「はっ、オラーンフーの路線を実現させるものだ。殺せ。」

---

[23] 1948 年 5 月、毛沢東ら共産党指導部は国共内戦の進展にともない、延安から河北平山県の西柏坡に移ってきた。

[24] ヤナギ科ヤナギ属、灌木、小高木。学名は、*Salix cheilophila* Schneid.。

と殺していました。省でたくさんの家畜を殺しているときに、ダオ・シチェンという人がいました。彼はそこからここに 20 頭くらいのヤギと子ヤギをくれました。

「持っていき飼養していてください。わたしは場所を探してあげましょう。殺してしまうかもしれません。」

と言いました。それで、わたしは

「あればすべて持って来なさい。」

と言いました。しかし、彼らは生まれたばかり子ヤギを連れて行き、切って、切って殺し、20 頭くらいの、子ヤギがいる、とてもよいヤギを殺して軍隊にあげて、行ってしまいました。ダオ・シチェンという人は今も存命です。わたしは彼には福があると思っています。そのようなひどいことをしていましたよ。飢えて死んだ子畜を皆山のように積み重ねていました。子畜をひとかたまりごとに、囲いに閉じ込めていました。殺してなくなりました。何もなくなり、わたしたちが「家畜がかわいそう」と言おうものなら、「オラーンフーの路線」とし、「資本主義の路線を実現した。思想革命をしてもよいですが、生産発展をしてはいけない」と言います。そうしているうちに、結局何もなくなりました。振り返ってみると、工場が止まりました。もしそのようでなければ、中国はとても発展していました。50 数年そのままでした。それでめちゃめちゃになりました。

――農業をしていましたか。

していません。今少し栽培しています。子どもたちが話していました。草と木を植えようかと話していました。「井戸を掘り、12 畝を開墾して植えようか」と子どもたちが話しています。60 年代にここで農業をしていません。何もありません。当時私たちは移動していました。66 年にマーゾンから来て、67 年の秋にこのあたりをとおった時、ラクダに乗った人が見えないほどのトゥング[25]（葦）がありました。そして、2 つの中隊がやって来て、

「今から私たちは作物を植えます。」

と言って、そこを何もなくなるまで刈り取りました。

「この葦がなんの役に立とうか。作物を植えたら、たくさん育ちます。」

としましたが、結局何もなくなりました。草も全くなくなり、耕地もなくなりました。そのようにしてなくなりました。塩類があるところに作物は育ちません。他に穀物や綿花を植えたところはありません。この上流で少し作物を植えていました。人に販売していません。自分たちが食料を自給するために植えていますと、数軒が植える家が出ています。今一人になったので、作物、ジャガイモを植える人はいなくなりましたよ。自分で食べるものを植えればよいと政府が言ったそうです。自分で植えて食べます。製粉機があり、とてもよかったです。今はなくなりました。食べるものを植えれば、お

[25] イネ科エゾムギ属、多年生草本。学名は、*Leymus secalinus* (Georgi) Tzvel.。

金が入るそうです。作物を植えてもよいでしょう。食糧を植えれば、補助金をあげて、すごいですね。早く植えればよいでしょう。種を取り、家畜飼料、草などいろいろ植えています。たくさん植えました。

――骨継ぎもしていましたか。

移住の際に獣医、産婆などをしていました。文化大革命のときに、薬箱などを没収し持って行ってしまいました。その箱をどうしたのか分かりません。持って行ってしまいました。わたしは 58 年以降、看護師になり、61 年に産婆育成訓練クラスで勉強しました。旗で教えていました。当時、獣医にもなりました。看護師でしたから、簡単です。のちに没収されてしまいました。田舎に夜中に来て、2 つの黄色い箱に入っていた服を没収していきました。箱の中にあった服を皆持っていきました。当時、モノを言う権利はありませんでした。のちに「弁償をします」と言われました。しかし、「面倒です。要りません」と言ってもらっていません。家に子供が生まれると、酒を使っていい加減にやっていました。今は子供が少なくなりました。子どもが生まれると聞くと行きます。そうでなければ、家にいます。出産を介助してもお金を取りません。くれる人もいましたが、わたしは受け取りませんでした。なぜかって、そのようなものを受け取る必要がありません。当時薬代だけもらいました。

今ちょうど入って来ました。彼女はすごい人です[26]。話すことができないですが、能力があります。冬は下流に行き、過ごします。夏と春は家畜を連れてここに来ます。家畜がたくさん増えました。2、300 頭になっています。話すのがうまくない以外は、仕事をよくします。何を話しているか、教えてあげます。指が 1 本ありません。

――お子さんは何人ですか。

わたしは 3 人息子がおり、娘が 1 人います。一番上はバトルフ、左旗にいます。酉年です。父のおかげで糧食局に入りましたが、糧食局は給料を払うことができず、なくなりました。2 番目は牧畜民で、バトウルジと言います。午年です。3 番目は娘です。ナランツェツェグと言い、ファラーと呼んでいます。申年です。村の北のホイト川（エジネー川）に住んでいます。バヤンボグドの牧畜民です。4 番目は北京にいます。エンクバイルと言います。亥年です。

――いつ再婚しましたか。

70 年です。夫はボインデリグルと言います[27]。80 歳です。娘がいましたが、亡くなっています。先

[26] 同居している女性のこと。娘ではない。耳が不自由で、夫の暴力から逃れて、アジヤースレンさんのところに身を寄せていた。

[27] 甘粛省金塔県出身の漢族。漢語名は杜如才。寅年。1926 年生まれ。10 代のときにエジネーに来ている。生家が貧しく、生活ができないので、国民党の軍に入る。しかし、逃げだして、エジネーにや

妻は文化大革命で亡くなりました。それで一緒になりました。

2005 年 5 月 24 日にエジネー旗で聞き取りした。

聞き手：児玉香菜子・ダシナムジル

引用文献

額済納旗誌編纂委員会（1998）『額済納旗誌』方志出版社

Konagaya Yuki, Sarengerile, and Kanako Kodama (eds.) 2011 *An oral history of mothers in the Ejene Oasis, Inner Mongolia.* Shoukadoh

児玉香菜子（2007）「エゼネの五〇年」中尾正義・フフバートル・小長谷有紀（編）『中国辺境地域の 50 年－黒河流域の人びとから見た現代史』pp.159-182、昭和堂

児玉香菜子・サランゲレル・アルタンチェチェグ（2014）極乾内モンゴル・ゴビ砂漠、黒河オアシスに生きる男たち 23 人の人生』アフロ・ユーラシア内陸乾燥地文明研究叢書 Vol. 10, 名古屋大学大学院文学研究科比較人文学研究室

ナムラ・サランゲレル・児玉香菜子（2014）「エジネーのオーラルヒストリー（３）ソルマージャブ（上）」『千葉大学ユーラシア言語文化論集』16：327-351

謝辞

本稿は「水資源変動負荷に対するオアシス地域の適応力評価とその歴史的変遷（代表・中尾正義、通称オアシスプロジェクト、2001 年～2006 年)」および JSPS 科研費 JP16・5669 の助成を受けたものです。アジヤースレンさんに心よりお礼を申し上げる。

（こだま　かなこ・千葉大学文学部／さらんげれる・中央民族大学蒙語系）

ってきた。生家は貧しく、戻ることはできなかった。康という人についてロバに乗ってエジネーまで 3 日かかったという。

An oral history of Ms. Ajiyasuren in the Ejene district, Inner Mongolia

KODAMA Kanako and Sarengerile

Summary: This oral history was provided by Ms. Ajiyasuren (b.1939) on March 24, 2005. This account describes the hardships of life before the establishment of the People's Republic of China in 1949. On the one hand, she insists that the Communist Party raised her standard of living. On the other hand, she tells us about difficulties of a 20-year forced migration and the Cultural Revolution. During the Cultural Revolution, Ms. Ajiyasuren was persecuted and her husband was killed. Her story shows that the victims of the Cultural Revolution were not only the educated and the rich but also ordinary herders.